随筆風旅行記

『色』で辿る大地と歴史５「青丹吉(あお・に・よし)から、社寺と古墳」

照山龍治

万葉集に、平城京を詠んだ「**あお・に・よし、奈良の都は、**咲く花の、匂うがごとく今盛りなり」という歌がある。この「**あお・に・よし(青丹吉)」の語源**として、二つの説があるそうだ。

一つは、**奈良地方で、青丹(あおに)が採掘**されたためとする説である。その**青丹は、「青(あお)」が「緑」を、「丹」が「土」、**つまり「**緑色の土**」を意味し、「顔料」となる「**岩緑青**(いわろくしょう)」のことである。

もう一つは、「**木々の緑に、平城京の華々しい丹(朱)色が映えている様子**」からとする説である。

その中で、**丹(朱)色の顔料、本朱(水銀朱)は、**その色彩とともに、**耐腐食性**から、東洋では、古代より、**呪術的な意味合いも持って使われ、「春日大社の本殿」**や「**平等院鳳凰堂の中堂四面扉**」に塗られ、「**高松塚古墳**」や「**キトラ古墳**」など「**古墳の石室に描かれた壁画**」や、**死者を葬る際や祭祀の場に、魔除け**として施された。

(春日大社の式年造替と本朱)

そのような思いを巡らせている中で、「**春日大社**」が「**第 60 次式年造替**」を終え、御蓋山（みかさやま）の西麓に、**綺麗な朱色の神殿が復元**された。

そこで、私たちは**本朱(水銀朱)**に会うため、春日大社を訪ねた。春日公園横にある鳥居をくぐり、長い参道を歩くと朱色に輝く本殿が現れた。その中で、外側の柵や、中門回廊、そして本殿に塗布されている朱色の色彩には、かなりの**色差**があった。**本殿**は**桃色を帯びた赤色**、それは「**生きている筋肉の色**」、「**動脈血の色**」を連想させた。また、**拝殿**は**黄色を帯びた赤色**、**外側の柵**は**オレンジ色**をしていた。宝物館職員によると、「**本殿は本朱、拝殿は鉛丹、外側の柵は樹脂**で塗られ、その**色差**だ」という。

「**本朱**」１００％で塗られた神社は、**春日大社を除けばほとんどない**。なぜ春日大社は**本朱**にこだわるのか。

宮司によれば、「**本朱ならではの、明るく、柔らかく、しかも深みのある尊い色**。これこそ、青々と繁った森におわす**春日の神様に最もふさわしい色調**なのだ」として**本朱**を大事にしているとのことだが、その一方で、「**春日神が造船や航海に関わっていた海洋民族、海部一族に関係していたからではないか**」

という説もあるようだ。**本朱を船底に塗布**することにより**耐久性に優れた船**を作ることができる。**腐食や貝殻の付着を防止**し、船の耐久性が飛躍的に増すのである。

（平等院鳳凰堂の大改修）

平安時代後期頃に建立した**「平等院鳳凰堂」**にも、**堂の四面扉は、本朱(水銀朱)が塗られていた**という。京都駅から JR で、宇治駅へ。所要時間約 30 分。駅から平等院へはタクシーで 5 分。平等院は改装中。宮大工の説明によれば、「**外側の橋等**は**樹脂**で塗装、**建物**は**丹土**で**塗装**した」とのこと。

そして、「塗装の過程で、南門近くの扉には、試行的に、**丹土**に、**本朱を混ぜて塗ってみたが**、殆ど**色差が出なかった**ため、コストのこともあり、今回の塗り直しでは、**本朱**は全く使わなかった」とのことである。

（酒船石と本朱の精製）

明日香村には、**「酒船石」という不思議な石造物**がある。

小高い丘の上にある**花崗岩の石造物**である。北と南の一部が欠けており、上面に「皿状のいくつかのくぼみ」と「それを結ぶ溝」が刻まれている。酒を造る道具、あるいは薬などを造るための道具とも言われ、諸説ある。また、近くに水を引いたと見られる土管や石の樋も見つかっているので、庭園の施設とも言われている。

『赤かめ』と呼ばれる明日香周遊バスに乗り、万葉文化館西口で降車。ボランティアスタッフの説明を受けた後、小高い山を登る。そこに酒船石はあった。酒船石がどのように使われたかには、いろんな説があるようで、ボランティアの方達が承知しているだけでも **10 とおりの説**があるという。その中の一つに、**「本朱(水銀朱)の粉末を流し、円形のくぼみに生成された本朱を溜める(比重の違う物質を流し分離させる)(紀の川の本朱を利用して塗料、絵の具、防腐剤などに使用)」**という説があるそうだ。ただ、「この**本朱(水銀朱)説**には、くぼみの深さが足りないので少し無理があるかな」とその方は付け加えた。

（国宝 高松塚古墳と高松塚壁画館）

「高松塚古墳」は、**明日香村平田地区にある。7 世紀末から 8 世紀初頭**にかけて築造された**終末期古墳**で、二段式の円墳である。

この古墳に国宝に指定された壁画がある。特に色彩鮮やかな西壁の女子群像は、歴史の教科書などにも紹介されている。昭和 47 年に樫原考古学研究所の調査によって発見され、国宝指定以来、一切公開されていない。

明日香周遊バスを「高松塚バス停」で降り、高松塚古墳に隣接する高松塚壁画館へ。歩いて五分程度で到着。壁画館は撮影禁止。壁画館の職員から顔料の資料をいただく。

赤色は「本朱(水銀朱)」、赤褐色は「ベンガラ」、もしくは「有機色料」、黄色は「有機色料の藤黄」、緑色は「孔雀石」、青色は「藍銅鉱」と一部「ラスビラズリ」、白色は「鉛白」、金色は「金」、銀色は「銀」、黒は「墨」とある。**特に、「本朱」は人物の「唇」と女性の服「赤い縞」**に見られるようだ。

少し横道にそれるが、**六世紀の女性の埴輪を見るとイヤリングやネックレスなどの装身具を身に着けている。**発掘によっても、**縄文時代や弥生時代の「装身具を身に着けた縄文人や弥生人が出現**する。そして、**古墳時代になると金や銀などの煌びやかな装身具**も、これに加わる。

ところが、中央集権国家が誕生する**七世紀後半にはイヤリングやネックレスなどの装身具が消滅する**のである。それを**如実に表しているのがこの「高松塚古墳」**であるという。

確かに、**高松塚古墳の人物は装身具を一切身に着けていない。**

ただ、その代わりに、色鮮やかに染め分けた多彩な衣装を身に着けている。ではなぜ装身具が消えてしまったのか。

小学館の「考古学千夜一夜」には、「飛鳥・奈良時代以降染色が発達し、社会の上層部の人々が色に熱中して、アクセサリーを忘れた」としているが、確かに、私が高松塚古墳の壁画を見た時に、感動した「色彩の美しさ」を考えると、「『もの』から『色』に大きく興味の対象が移った」ということは、十分に理解できる。

(特別史跡 キトラ古墳とキトラ古墳壁画管理施設)

「キトラ古墳」は、**明日香村の南西部、阿部山にある。**この古墳は、**7世紀末～8世紀初頭頃**に造られた。国の特別史跡。飛鳥駅からタクシーで五分程度。キトラ古墳壁画管理施設に到着。展示室は、全国の古墳と比較しながら、キトラ古墳の特徴を解説していた。

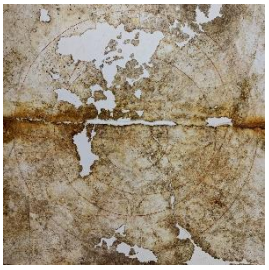
キトラ古墳壁画の色彩については、明日香村ウェブサイトに掲載されている。

玄武は、頭から腹にかけては黄土色に着色。全体にやや緑色が施され、**青龍は、舌先が「赤色」で、上顎の部分は緑色**が施されている。

朱雀は、背中及び羽根は赤色で、羽根模様を斑につけ。尾羽には黒い斑点紋様があり、

白虎は、基本的には白黒で描かれているが、口内と腹に赤色を塗っている。

また、**天文図には、金箔の星**と、これを**朱線で結んだ星座**がある。



このようなキトラ古墳壁画の顔料は、分析事例が少ないようだが、古墳壁画の保存と活用に関する検討会が一部分析している。

蛍光Ｘ線分析の結果、①赤色が認められる**青龍の舌部**からは**水銀が検出**された。**顔料は本朱(水銀朱)**が用いられている。また、②**胴部およびその下方**で銅が検出され、**銅を構成元素とする顔料（緑青や群青）**が用いられていることが推定されるとのこと。

なお、**「金箔」**や**「銀箔」**は、**金・銀アマルガムを塗った後に加熱して水銀を飛ばす**という手法を使っているとのことだ。

このように、**本朱(水銀朱)**は、古より、金に匹敵する**文化的・科学的・経済的な価値**を持ち、さらに**医薬的な価値も持つ貴金属・希少鉱物**として取り扱われてきた。

その**主な鉱床は**、奈良と伊勢を中心とする**大和鉱床群**と、**大分**、鹿児島、佐賀、長崎を中心とする**九州南部・西部鉱床群**で、**中央構造線とほぼ一致**しており、古代国家の成立にも重要な役割を果たしてきた。

（そして大分へ）

その中で、**大分は、九州南部鉱床群の中にあって、中央構造線が走り、多くの活断層と火山群もあり、金鉱山とともに数多くの本朱鉱山が分布**していた。

そのため、**真名野長者伝説**(豊後大野市三重町・臼杵市)や**富貴寺**(豊後高田市)、**宇佐神宮**(宇佐市)、**築山古墳**(大分市佐賀関町)、そして**別府金山跡**(別府市ラクテンチ)など、大分の至る所に、**本朱にまつわる「伝説」や「寺社」、「古墳」、「鉱山跡地」などが残り、丹生(大字)や丹生川、丹生神社など、丹生の名前を持つ地名や神社など**も数多く残っているのであろう。

コロナ禍の中、楽しかった旅行に思いを寄せて

2019 年 11 月の奈良(京都)旅行より